でつたれいた

ふるさと うたの風土記

せつなかった

せっつのうた　―ふるさと うたの風土記―

昭和六十一年三月三十一日発行

編集・発行――兵庫県立図書館（明石市明石公園一―二七）

印　　刷――ウニスガ印刷（西脇市和布町三九）

都びとの
ふるさとを想う歌
防人の
妻を恋うるの歌
愛と別れの歌に
　摂津の歴史は流れた

目次

摂津……1
猪名・灘・武庫・六甲
神戸市……27
東灘区……32
岡本・処女塚・御影
灘区……42
摩耶・敏馬
中央区……52
生田・神戸港・布引・湊川神社
兵庫区……83
経の島・福原・湊川・夢野・和田
北区……98
有馬・鼓ケ滝
長田区……120
真野・淀の継橋
須磨区……125
一ノ谷・須磨
尼崎市……177
板田橋・浦の初島・長洲
西宮市……185
御前・甲山・苦楽園・鳴尾・広田・鉾池
芦屋市……205
伊丹市……221
昆陽
宝塚市……235
小浜
川西市……233

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

三田市……241
羽束
川辺郡……233
猪名川町……233
採録文献……247
摂津の国略図……249

摂津

蘆の屋のこやともいはば津の国の難波のことか云はず有るべき
（兼盛集）

あしの屋のこやの蜑人しほたれて袖ほすひまもなき身なりけり
静仁法親王（新後撰和歌集）

蘆のやのこやの篠屋の忍びにも人に知られぬふしを見せなむ
源重之（続後撰和歌集）

あしの屋のこやの渡に日は暮れぬいづち行くらむ駒にまかせて
能因法師（後拾遺和歌集）

うちしぐれ物さびしかるあしの屋のこやのねざめに都恋しも
後徳大寺左大臣（玉葉和歌集）

今朝みれば露ぞ隙なき蘆のやのこやの一夜に秋やきぬらむ
中務卿宗尊親王（続千載和歌集）

汐風はなる尾の松に音づれてわたの入江にのこる月影
紫金台寺入道二品のみこ（夫木和歌抄）

霜がれはあらはに見えし蘆の屋のこやのへだては霞なりけり
待賢門院堀川（新勅撰和歌集）

旅寝する蘆の小屋にて見る時もおも変りせぬ秋の月かな
大納言経信（新続古今和歌集）

もがみがは　瀬々のいはかど　わきかへり　おもふこゝろは
おほかれど　行くかたもなく　せかれつゝ　そこのもくづと
なることは　藻にすむむしの　われかれと　おもひ知らずは
なけれども　いはではえこそ　なぎさなる　かたわれぶねの
うづもれて　引くひともなき　なげきすと　なみの起ち居に
あふげども　むなしきそらは　みどりにて　言ふこともなき
かなしさに　ねをのみなけば　からころも　おさふるそでも
朽ちはてぬ　なにごとにかは　あはれとも　おもはむひとに
あふみなる　うち出のはまの　うちいでて　言ふともたれか
さゝがにの　いかさまにても　かきつがむ　ことをのきばに
吹くかぜの　はげしきころと　知りながら　うはのそらにも
をしふべき　あづさのそまに　みや木ひき　みかきがはらに
せりつみし　むかしをよそに　聞きしかど　我が身のうへに
なりはてぬ　さすがに御代の　はじめより　くものうへには
かよへども　なにはのことも　ひさかたの　つきのかつらし
折られねば　うけらがはなの　咲きながら　ひらけぬことの
いぶせさに　よものやま辺に　あくがれて　このもかのもに
立ちまじり　うつふしぞめの　あさごろも　はなのたもとに
ぬぎかへて　のちの世をだに　と思へども　おもふひと〳〵
ほだしにて　行くべきかたも　まどはれぬ　かかるうき身の

つれもなく　経にけるとしを　かぞふれば　いつつのとをに
なりにけり　いま行くすゑは　いなづまの　ひかりの間にも
さだめなし　たとへばひとり　ながらへて　過ぎにしばかり
すぐすとも　ゆめにゆめ見る　こゝちして　ひまゆくこまに
ことならじ　さらにもいはじ　ふゆがれの　尾ばながすゑの
つゆなれば　あらしをだにも　待たずして　もとのしづくと
なりはてむ　ほどをばいつと　知りてかは　くれにとだにも
しづむべき　かくのみつねに　あらそひて　なほふるさとに
すみの江の　しほにたゞよふ　うつせがひ　うつしごゝろも
うせはてて　あるにもあらぬ　世のなかに　またなにごとを
みくま野の　うらのはま木綿　かさねつゝ　うきに堪へたる
ためしには　なる尾のまつの　つれ〴〵と　いたづらごとを
かきつめて　あはれ知られむ　行くすゑの　ひとのためには
おのづから　しのばれぬべき　身なれども　はかなきことも
くもとりの　あやにかなはぬ　くせなれば　これもさこそは
実なしぐり　くち葉がしたに　うづもれめ　それにつけても
津のくにの　いく田のもりの　いくたびか　海士のたくなは
くりかへし　こゝろに添はぬ　身をうらむらむ

反　歌

世の中は憂き身にそへる影なれや思ひすつれど離れざりけり

源俊頼朝臣（千載和歌集）

わたの原八十島かけてこぎいでぬと人には告げよ蜑のつり舟

小野篁朝臣（古今和歌集）

笠の露眠むらんとすれば犬の声

小林一茶（西国紀行）

兵庫讃歌

―いつかきた道への回帰と五弁の花のファンタジア―

摂津・播磨・淡路篇Ⅰ

有間山、稲葉の雲に触れて揺れた行基田の風は
武庫の浦廻をすぎて、みかしお播磨の泊、船瀬へ。
折りからの、五月雨ぞらを焦す薪能の火あかり、
船弁慶の中の舞、花吹雪ならぬ笛、大鼓、小鼓の
律呂と調べの緒の阿吽、地謡のはこび。
六甲、摩耶がこだまをかえす灘五郷の酒造り唄。
産所のくぐつ、夷かき。
ふるさとは近きにありても想うべきもの、
王朝人の愛情遍歴。葦屋のうない処女。汐汲む海女むすめ
たちのはかない恋。

えびらの梅。世話の道行きならぬ飛梅の旅まくら。
朗詠、今様のみやび。平家納経につながる絵巻のかずかず。
大輪田ノ泊の修造。福原の京づくり。
くすのきの薫染。葉二つの笛の嫋々と尽きることを知らぬ
哀音。
須磨琴のおもいつめたしのび泣き。
たくづのの新羅、唐への遣使、
遠の朝廷への天馳使、
宇佐奉幣の廷臣たちも船路から過ぎた
玉かぎる夕陽を名に負う大門。

富田砕花

摂州菟原旅宿即事

山根海畔客中居
与友留連覃月余
露色秋籠征雁陣
潮声夜入旅人廬
稲花戸外追風馥
柿葉墻陰学雨疎

請問土民営底事
生涯産業釣江魚

蓮禅（本朝無題詩集）

菟原途中

六甲山南三塚辺
輿窓懐古思茫然
波涛湾曲千帆影
邑里東西万古煙
残墨清泉分野碓
故宮黄菜満万里
今時自作今時盛
空感楠公戦没年

菅茶山（黄葉夕陽村舎詩）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

送秀貞遊有馬山

四十八盤有馬山
山迎水送隔風烟
人家都在白雲裡
将道桃源暫作仙

左正彬（日本詩選）

菟原晩帰

歩出閭門日脚傾
村居纔隔一牛鳴
連冥密々蟾光薄
涼自流蛍火裡生

（霞亭詩鈔）

自浪華抵御陰舟中作

風帆一片矢離弦
凌破暁雲残月天
六甲摩耶猶未見
漁灯残処認呉田

中島棕隠

自兵庫至浪華舟中得日写

海緑山紅映暾日
順風却恨舟行疾
欲将新語写真光
佳景過佳難上筆

小川竹外（金城集）

●猪名

あやしくもしぐれに帰る袂かなゐなのかさ原さしてゆけども

法性寺入道関白（夫木和歌抄）

あられふるゐなのしばやまゆく人のしらたまつつむまくりでの袖

（按納言集）

霰ふる猪名野ふし原風こえて衣手寒し道のべの冬

慈鎮（拾玉集）

有馬山いなの小笹の一ふしも帰りかり寝の枕へたつる

智忠親王

有馬山おろす嵐の寂しきに霰ふるなりゐなのさゝ原

藤原定家（拾遺愚草員外）

有馬山おろす嵐のそよぎつゝ秋をも待たぬ猪名の笹原

（俊成卿女集）

ありま山おろす嵐の吹きよせていなの篠原もみぢしにけり

藤原賢隆朝臣（夫木和歌抄）

ありまやまおろすあらしやさえつらん雪ふりにけりゐなのふしはら

（有房集）

有馬山みねの朝霧晴ぬれとまた露深きゐなのさゝ原

前中納言基成（藤葉和歌集）

ありま山みねの嵐に月さえてゐなのかはらにちとり鳴くなり

伊嗣朝臣

有馬山みねの松風おとさえてゐなのさゝはらうづらなくなり

左近中将公衡卿（夫木和歌抄）

有馬山みねの松風露ふけば夕日こぼるるいなのささはら

飛鳥井雅章公

有馬山峯行く雲に風沍えて霰落ち来る猪名のさゝ原

法印定為（新続古今和歌集）

ありま山やまかぜあらく降る雨にまして宿なきいなのさゝ原

深草元政上人

有馬山夕越え来れば旅ごろも袖に露ちる猪名の笹原

前大納言俊光（続後拾遺和歌集）

ありま山ゐなのさゝ原かぜ吹けばいでそよ人を忘れやはする

大弐三位（後拾遺和歌集）

有馬山ゐなのさゝ原行きくれて一夜の宿に嵐吹くなり

大納言俊定

ありま山ゐなのしはやに月もれはいてゆくもなく袖そぬれける

俊恵（林葉和歌集）

如何にせむ朧月夜の有明もいなのみなとの春の松風

慈鎮（拾玉集）

いかばかり降る雪なればしなが鳥ゐなのしば山道まどふらむ

藤原国房（後拾遺和歌集）

うきねする猪名のみなとにきこゆなり鹿の音おろす峯の松風

藤原隆信朝臣（千載和歌集）

大海に嵐な吹きそ息長鳥猪名の湊に舟泊つるまで

藤原卿（万葉集）

おほつかなゐなのわたりの夕暮に誰をこやとてまねくすゝきそ

素覚（仙洞歌合）

おほみふねゐなののおきのやしほぢにからろばかりぞまかぢしげぬく

源顕仲（堀河百首）

かきくもり夕立すらし有馬山ゐなのゝ小さゝかせさはくなり

従三位家衡卿（内裏名所百首）

かくのみにありけるものを猪名川の沖を深めてわが思へりける

和ふる歌

ぬばたまの黒髪濡れて沫雪の降るにや来ます幾許恋ふれば

作者未詳（万葉集）

風さむみ夜や更けぬらむしながどり猪名の湊に千鳥なくなり

藤原顕仲朝臣（新後撰和歌集）

風寒みゐなの中山こえくればならのかれ葉に霰ふるなり

藤原道経（夫木和歌抄）

風さやぐゐなのささはら夏のよのみじかきゆめをむすぶ白露
（郁芳三品集）

風さやぐ猪名の笹原雪降りて道こそ絶えめ音も絶える
藤原定家（拾遺愚草員外）

風渡る猪名野のをざ、打ち靡き露もたまらぬ白雨の空
（順徳院御集）

鴈なきてはだれ霜ふる此のゆふべゐなのは山の紅葉しにけり
法印実伊（夫木和歌抄）

かりにきてゐなの、小笹露なから結ふ枕にあくる空かな
藤原康光（内裏名所百首）

假寐する猪名の笹原うきふしも知らでや今宵月に明かさむ
養徳院贈左大臣（新続古今和歌集）

かりねせむゐなの、小笹露ふかし跡なき山のゆふ立の空
左近衛中将忠定朝臣（内裏名所百首）

假寐訪ふ月を一夜の契りにて手枕うとき猪名の笹原
定顕法師（新後拾遺和歌集）

假寝にも露の名残は有馬山猪奈野さ、原一夜ならねば
小笠原信濃守長勝

かるもかく猪名野の原のかり枕さても寐られぬ月をみるかな
藤原隆祐朝臣（続古今和歌集）

雲をくるむこ山おろしふけにけりいなのみなとにはる、月かけ
親盛（歌枕名寄）

こやの池の蘆まのこほりむすぶらし嵐あれゆくゐなのしば山
前大納言経平卿（夫木和歌抄）

衣手に日かげかざして見わたせば猪名の松ばら時雨ふるなり
信定（須磨日記）

さ、枕猪名野の夜半に假寝して古郷遠き月を見るかな
道成法師（新後拾遺和歌集）

さしのぼるゐなの湊の夕汐にひかり満ちたる秋の夜の月
入道前太政大臣（続古今和歌集）

五月雨にゐなの河岸水こえてをざ、がはらやいづこなるらむ
後法性寺入道関白（夫木和歌抄）

さみだれにゐなのささはらみわたせばただうき草のここちこそすれ

（経家集）

五月雨に猪な野のをさゝ露馴て心ともなく秋を恋らし

僧正行意（内裏名所百首）

さよすがらむこのうらかぜさえさえて月ぞくまなきゐなのささはら

（実家集）

しかの音の身にしむ夜半はいにしへのいなのかり人うらめしきかな

（良玉集）

しなが鳥猪名の笹原分け行けば払ひもあへず降る霰かな

慈鎮（拾玉集）

しながどりゐなのささやのかりまくらひとよが露にふしぞわづらふ

雅経（明日香井集）

しながどりゐなのさゝやの假枕みじかき夜半も臥しうかりけり

前大納言資季（続拾遺和歌集）

しなが鳥ゐなの旅寝のさゝ枕あはれに辿る夢路なりけり

慈鎮（拾玉集）

しなが鳥ゐな野の海に舟とめて小笹が原の風をまちみむ

前中納言隆房卿（夫木和歌抄）

しなが鳥猪名野の田つら霧晴れて武庫山てらす夕月の影

夏目甕麿

しなが鳥ゐな野の原の篠枕まくらの露ややどる月影

鎌倉右大臣実朝卿（金槐和歌集）

しなが鳥猪名野の小笹打ち靡き篠に吹きしく秋の夕風

後花山院内大臣（新千載和歌集）

しなが鳥ゐなのは山に旅ねしてよはの干潟にめをさましつゝ

俊頼朝臣（夫木和歌抄）

し長鳥猪名のふし原青山にならむ時にを色は変らむ

（猿丸大夫集）

しなが鳥ゐなのふし原飛びわたるしぎのはねおと面白きかな

読人しらず（拾遺和歌集）

しなが鳥猪名野を来れば有間山夕霧立ちぬ宿は無くて

作者未詳（万葉集）

しなが鳥ゐな野を行けば有馬山霧立ち渡り明けぬ此の夜は

読人しらず（古今和歌六帖）

しなが鳥猪名山響に行く水の名のみ縁さえし隠妻はも

作者未詳（万葉集）

し長鳥猪名山ゆすり行く水の名のみ流れて恋ひ渡るかも

（猿丸大夫集）

白露のゐなのささはらふく風もたまらぬ袖のわかれとふらん

（郁芳三品集）

白露のゐなのささはらわけなれてやどかる月の秋のおもかげ

（郁芳三品集）

旅衣つま吹く風のさむき夜に宿こそなけれ猪名のさゝ原

前大納言為家（続後拾遺和歌集）

千鳥なくゐなの河原を見る時は大和恋しく思ほゆるかな

（古今和歌六帖）

千鳥なくゐなのはまやのあけがたに苫もる月の影ぞ寂しき

覚延法師（夫木和歌抄）

千鳥なく猪名の湊に風さえて浪間にのこる有明の月

俊恵法師（続後拾遺和歌集）

月きよみゐなのささはらみわたせばしのにおしなみ雪ぞつもれる

（有房集）

露しげきをささがはらをわけゆけばすそやぬるるゐなのさとびと

公重（風情集）

年越ぬさのみはまたししなか鳥いなのみそ川すましとすらん

源朝臣俊頼（永久四年百首）

照射にもしながどりをや大丈夫がゐなの端山をわけ忍ぶらむ

皇太后宮大夫俊成卿（夫木和歌抄）

夏かりの猪名のさゝ原折り敷きて短き夜半のいやは寝らるゝ

皇太后宮大夫俊成女（新続古今和歌集）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com